ボランティア

岡山からも多数

岡山県下からも民間ボランティアらが続々と神戸入りしている。医療ボランティア団体のアジア医師連絡協議会（AMDA、本部・岡山市）は地震発生の十七日以来、長田区内で被災者の診療活動を続ける。

同区役所などの入った合同庁舎。通路やフロアには寝起きする被災者がびっしり。その五階の中央保健所がAMDAの拠点。全国から医師や看護婦らが次々に参加して現在では約百人に上り、保健所内での二十四時間診療や避難所への巡回診療などを行っている。

「寒さや疲労、衛生状態の悪化などで風邪が増加。そして避難生活の不安や焦りが募っており、精神的ケアも必要になってきている」と筑波大から来た岩井亮医師（三〇）。

参加した医師らは、保健所内のフロアで寝袋などで仮眠する。暖房は無く、水やトイレなども満足に使えない。夜は寒さが厳しく、ビニール袋なども体に巻いてしのいでいる。

AMDAの現地事務局を担当する倉敷市茶屋町早沖の小原一郎さん（三五）は「だんだん体力的にきつくなっているが、みんなすごい熱意。何とか頑張りたい」と話す。

黒住教本部（岡山市尾上）が呼びかけたボランティア・グループは、約千六百人の被災者が避難している兵庫中学校（兵庫区永沢町）へ。グラウンドにテントを張り、二十三日から朝夕の炊き出しをしている。「温かい食べ物がほしい」との要望にこたえたものだ。

グループは同本部会計課長の小野紘一さん（五一）や一般応募のボランティアら総勢十一人。「ボランティア募集の新聞記事を見てすぐに応募した。何か役に立てれば自分としてもうれしい」と岡山県児島郡灘崎町の主婦（四九）。

夕方に出すメニューはかす汁、のっぺい汁など日替わり。白菜、大根や鶏肉などが入っている。順番待ちをする被災者は段ボール箱で作った即席の盆にカップめんの空き容器。「おおきに」。一時間ほどで千六百人分がなくなった。

民間人だけではない。岡山県は、兵庫県庁（中央区下山手通）の十二階に山陽団地（赤磐郡山陽町）、泉団地（和気郡和気町）の両県営住宅への入居を受け付ける臨時窓口を二十四日に開設。伊藤昭・県住宅課住宅主幹（五一）と西山英利・県住宅供給公社主査（三七）の二人が詰めている。

二十七日夕までの申し込みは計二十一件。伊藤さんは「り災証明は後からでも取れるので、印鑑のある人なら受け付けている。ただ、就職先も世話してほしいと涙ながらに言われる人が多くて…」と困惑気味だ。

長田区長楽町の借家がつぶれ、泉団地への入居を決めた無職和久田発（すすむ）さん（六五）は「和気町は妻の父の里だが、年をとっているだけに転居するのはつらい。西宮市で働く長男と別れ別れになるし」と言葉少なに語っていた。